
キャプテン・オリマー冒険記

怜lay

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キャプテン・オリマー冒険記

【Nコード】

N4536A

【作者名】

怜lay

【あらすじ】

任天堂ゲームキューブソフト「ピクミン」を元ネタに使用し、大胆に擬人化に挑んでみました。ゲームをプレイしたことがある人は、大体の流れはつかめると思います。しかしゲームと違うのは、それぞれのキャラに感情とセリフがあるところ、でしょうか。実際のピクミンがこんな感じだったら、きっと買う人は多くなるんじゃないかなw

序章 墜落と出会い（前書き）

宇宙規模の運搬業を営む「ホコタテ運送」に勤務するエース・パイロット、キャプテン・オリマー。でも、今は長期休暇中。のんびり宇宙を散歩していました・・・

序章 墜落と出会い

「序章」

「うっっ・・・んっ！」

大きく伸びをするオリマー。

「今日は何処に行こうかなあ」

レーダーで現在地を確認して周辺に惑星がないか探索する。

「おっ！？なんだ・・・？」

レーダーに小さな反応。それももの凄い速さでこちらに向かっていく。

「こ、これは・・・ヤバいつ！」

急いで緊急退避に取り掛かる。

間一髪、ギリギリのところを宇宙船ほどの大きさのつぶてが通り過ぎる。

「あ、あぶね・・・」

その時

ドオオオオンッ！！

「うわっ！？」

大きな衝撃。

後ろに控えていたとてつもなく大きな隕石が衝突。

「くそっ、ハンドルが動かねえっ！」

どうにか受け流そうとするも、ハンドルが動かない。

『デンジャー！ デンジャー！』

宇宙船から危険信号が発せられる。

「わかってるっ！」

このままでは宇宙船が持たない。

横っ腹に当たった隕石はメインエンジンスレスレで止まっている。

「エンジン全開っ！無理にでも突破するんだっ！！」

『イエッサー。エンジン全開!』
メインコンピュータが復唱する。
さらに大きな衝撃。

タコメーターが大きく振り切る。
ガリガリガリッ!!!

隕石と宇宙船が擦れる音。

「くそっ、このままじゃ・・・」

『メインエンジン、停止!』

「!なんだってっ!？」

唯一のメインエンジンが止まってしまった。

突然の加速でオーバーヒートしてしまったようだ。

瞬間、大きな衝撃が宇宙船を襲う。

「うわあっ!」

宇宙船が軌道を逸れ、小さな星の重力に引っ張られる。

「くそっ!サブエンジン、点火だっ!」

『サブエンジン、点火!』

衝撃を和らげる為にサブエンジンを点火する。

点火までには多少時間がかかる。

その間にも宇宙船は徐々にスピードを上げる。

『メーデー!メーデー!」ダイナモ”より発火!』

内部の燃料から火の手が上がる。

と、同時に引力との摩擦力で宇宙船外部からも火が上がる。

「こ、これじゃエンジンに火が点く前に燃え尽きる・・・!」

だんだん大地が目前に迫ってきた。

緑の多い星だった。

『メーデー!メーデー!メ・・・!・・・ザザーッ』

「おい、どうしたんだよっ!？」

メインコンピュータが何も応えなくなってしまった。

外を見ると、火の玉となった宇宙船のパーツがどんどん落ちていくのが見える。

「なっ!？」

直後、とてつもない衝撃がオリマーを襲う。

「うわぁぁっ!」

・

・

・

・

遭難0日目　↳遭難地点

「いててて・・・」

なんとか宇宙船から這い出してきたオリマー。

振り返ると

「あっちゃ・・・やっちゃったな」

ヒックリ返ったボロボロの宇宙船があった。

メインエンジンまでもを失って、宇宙船としての機能は全く持っていないということだ。

「ん・・・どうしようかな」

とにかくジタバタしても始まらない。その辺になにか無いか探すべきだろう。

「どれどれ・・・ん？」

グルッと見回す。

不思議な花が何本かと、丸い大きな何かがある。

草花の多いこの星だ、原生的な生物も多数残っているのだろう。

おそらく、人間らしき生物はいないと考えていい。

「となると、早めに出ないと危険だな・・・」

宇宙服が外せないために、こめかみを掻こうにも掻けない。

テクテクとその辺を歩いていると、

「あなた・・・誰？」

「!誰だっ!？」

声のした木々を見上げる。

「お、驚かせてごめんなさい。あたし、ユーシイっていうの」

一本の木から下りてきた赤い服のような物をきた同じ背丈くらいの女の子。

「そうか、この星の人だね」

「ええ、そう。あなたは誰？」

先程の質問を繰り返す。

「オレはキャプテン・オリマー。あの宇宙船に乗ってたんだけど、隕石とぶつかってね」

「そうなの・・・大変だね、オリマーも」

とにかく人に会えたのは心強い。

「この星のことを詳しく聞かせてくれるかい？」

「ええ、いいわ」

ユーシイはテツテツと歩いていくと、さっき見た花を指して、

「あれはペレット草っていうの。あの真ん中にあるペレットっていう私たちの栄養分になる実を付けるのよ」

「私、たち・・・？」

この星にはユーシイのような生物がまだいるのだろうか。

「うん。この星には私の他にも大きな生き物がいっぱいいるんだ。

皆凶暴だから気をつけたほうがいいよ」

「そ、そう・・・」

何気ないことをスラッという。思いのほか恐ろしいことを。

「私はこの星では一番弱い存在なの。”フェアリー”って呼ばれたこともあったけど」

「フェアリーか・・・」

たしかに妖精のような容姿を持っているともいえない。

「この星の生物たちは夜になると凶暴性を増すの。だから私たちは、夜は空に上って安全を確保するんだ」

「空、って・・・どうやって？」

「あれだよ」

さつき降りた来た木の上を指す。

木の上には、玉葱に良く似た形の赤い飛行船が停滞していた。

「あれは”オニオン”っていうの。私はあの中で生まれたの」

「ふ〜ん・・・」

オニオンはフェアリーの母体ってことか。

他にもオニオンがあればそれに属するフェアリーがいることになる。

「他にも、あのオニオンはあるのかい？」

「う〜ん・・・詳しくは知らないけどいくつかあるみたい。空に上がったときにいくつか見たことがあるの」

「そっか・・・」

彼女だけではちよつと心細いところがある。

もつと仲間が欲しいな。

「そういえば、君は一人なの？」

「うん、そうだよ」

「ふうん、って何してんの？」

「ふえ？」

軽々と大きな岩を持ち上げるユーシィ。

思わず啞然としてしまう。

「うん、時々こうしないと力が落ちちゃうからさ」

「ち、力持ちなんだ・・・」

「うんっ」

なんだかうれしそうだ。

「あ、じゃあさ、ちよつとお願いがあるんだけど」

「ん？ なにかな？」

「あの宇宙船、ボロボロでさ、動かないんだ。元に戻るのにはあと30個ぐらいパーツが必要なんだけど、

オレ一人ではどうにもならないから・・・」

「ふんふん、つまり。そのぱーつっていうのを集めればいいのね」

「そうなんだ。手伝ってくれるかな？」

「モッチロン。手を貸してあげるよ」

胸を張るユーシイ。こういうところはちょっとカワイイと思う。

「そっか、助かるよ。ありがとう」

「んっんゝいいってことよ。何かの縁ってことで、ね」
右手を差し出す。

「あ、そっか。よろしく頼むよ」

握手かと思つて右手を差し出すが、どうやら違つみだ。
キョトンとしている。

「ん？何か違うのか？」

「これはあゝ・・・」

サムアップの形で、四本の指を絡め合い、親指を合わせる。

「ふうん、この星では握手はこうやるのか・・・」

「そういうこと。オリマーの星ではどうやるの？」

「ああ、オレの星では・・・」

普通に右手を差し出す。ユーシイも真似をする。

ユーシイの手を握る。

「よろしく、ユーシイ」

「うんっ」

どうやら心が通じ合つていふのはこういうことらしい。

「で、早速なんだけど」

「うん？」

「あの宇宙船、メインエンジンが無いから動かすこともできないんだ」

「へえ、そうなの」

メインエンジンがないと何も出来ない。

まずはメインエンジンを探さないと。

「近くに落ちてることを願ってるよ」

「そうだねゝ・・・あ、ちよつと待つて」

そういつて一番高いと思われる木に登つていく。

「あゝ、やっぱり！アッチに変な物落ちてるよゝ！」

指差したほうを見ると、岩山があつて向こうに行けそうに無い。

とりあえず、近づいてみると、岩山に挟まれるようにダンボール、
だろうか。が置いてあった。

「これは・・・」

「ふうん、これはちよつと重そうだけど・・・」
箱に手をかけてグツと力を入れる。

「うゝん・・・っ!」

本気で押してもビクともしない。

「はあ、ダメだこりゃ」

箱に寄りかかって座る。

ユーシイは箱を観察している。

手を当てて、

「・・・よっ!」

思いつきりなのか、衝掌を繰り出す。

その一撃で、箱は大きく動く。

「うわわわっ!」

後ろに転がってしまった。

「ふふゝん」

「すっげ〜・・・」

箱の向こうには台地があった。

台地へ向かう上り坂の袂にそれはあった。

「おお〜!これはっ!」

これぞまさしくメインエンジン!神様はオレを見捨てなかったゝ!

「さて、あとはこれを運ぶだけなんだけど・・・」

「どれどれ・・・」

ユーシイはメインエンジンを持ち上げようとする。

「うゝん・・・一人じゃちよつち厳しいかな。オヤマー、手伝って」

「オッケー」

ユーシイとは反対側に立ってメインエンジンを持ち上げる。

「よいしょ、っと」

二人で、宇宙船の前まで持っていく。

宇宙船には物体転送装置がついているから、ボタン一つでセット可能だ。

「えーっと、たしかこのへんに・・・あ、あつたあつた」

ボタンを押すと、メインエンジンは吸い込まれるように宇宙船の元あつた場所に戻った。

それと同時に、宇宙船の向きも元に戻る。

「よし、これで飛び立つことは可能になったかな」

「よかったね」

ひとまず安心、というところか。

「でもまだ宇宙に出るのは無理かな・・・」

まだまだパーツが欠落している。

宇宙に出るには燃料も足りないし、火力も足りない。

「とにかく、今日は休もう」

「あ、待つて」

宇宙船に入ろうとして、ユーシイに呼び止められる。

「ちよつとお願いがあるんだけど」

「なに？」

「あの・・・お腹空いちゃって・・・」

「ああ、そうだね」

えっと、確かペレットが栄養分だって言ってたよな。

「あれでいい？」

赤いペレット草を指す。

「うん」

「よし」

ペレット草の根元に近づく。

この星の生き物はみんな凶暴らしいけど、植物は温厚なのかな。襲つてこない。

「はあ・・・っ！」

拳を腰溜めにして気合を入れる。

「せいっ！」

ペレット草に向けて聖拳を放つ。

ペレット草は実を残して地中に戻っていく。

「おお〜！」

ユーシイが歓声を上げる。

「ほらっ」

ユーシイに手渡す。

「ありがとっ」

ユーシイはペレットを大事そうに抱えてオニオンへと戻っていく。

「？食べるんじゃないのか？」

「食べないよぉ。っていうか、食べれないよ、硬くて」

ペレットをオニオンの下に掲げると、さっきパーツを戻した時みたいに吸い込まれていく。

「ペレットは、こうやってオニオンに一度預けて、”大地のエキスを”に戻してもらわないと食べれないの」

オニオンの頭の部分から黄金色のゼリー状の物質が出てきた。

「ふうん・・・」

放物線を描いてこちらに降ってくるエキスを。

「あ、オリマー危ない！」

「え・・・？」

次の瞬間、目の前が黄金色に染まる。

どうやらエキスの中に入ってしまったようだ。

「ぶはっ！」

どうにか、エキスから這い出す。

「大丈夫？」

「な、なんとか」

「よかった。どうなることかと思ったよ」

ユーシイは安心すると、大地のエキスへと向かう。

「それ、どうやって食べるの？」

「これ？吸うんだよ」

吸うのか。

「ふうん・・・」

ちゅうちゅうの音を立てながら吸い上げるユーシィ。

どうやったらその小さい体に収まるのか、全部吸いきってしまった。

「ふう、お腹いっぱい」

ユーシィの頭に付いている葉っぱが花へと変わる。

最初は飾りだと思ってたけど、フェアリーも植物、なのかな。

大地のエキ스는この星の植物の栄養源のようだ。

「さて、と。今日はもう休もつか。そろそろ日が暮れるよ」

「ん、そうだな。夜は危険だ、ってさっき言ってたし」

ここいら辺には原生生物がいる気配はないが、夜になるとここまで来るかもしれない。

油断は禁物だ。

「この星の一日は早いんだな」

「そう？ 私には普通だけだな」

「そりゃ、この星にずっと住んでいれば慣れるだろうさ」

この星の一日はホコタテ星でいうと約18時間だ。

ホコタテ星では20時間で一日が終わる。あまり変化はないな。

「これならすぐ慣れるかな」

「そうだね、すぐ慣れるよ」

「あ、そうだ。ユーシィ、これ」

「ん？」

ポケットから小型通信機を渡す。

「何かあったらこれに話しかけてくれ。オレが応える」

「ふうん・・・わかった。ありがと」

なんだかよく分かってないみたいだったが、とりあえずポケットにしまう。

「それじゃ、また明日」

「うん、おやすみ」

それぞれの船へと帰って行く。

今日の出来事を日記に書いておこう。

「今日の発見、と・・・」

この星にはユーシイのようにフェアリーと呼ばれる生物、というか植物に近いようだが、のほかにいろいろな生物がいるみたいだ。それらが皆、ユーシイのように心優しいとは限らない。油断は禁物だ。

この星の植物たちは大地のエキスを養分としているらしい。ユーシイは赤いペレットから取れるエキスが大好物のようだ。ひとまず、宇宙船で空に飛び立てるようになった。

空から見下ろす大地には、青々とした森が茂っている。

オレはここら一帯の森を”希望の森”と名づけた。明日からは、この森を探索することにする。

未だ、宇宙船には29個ものパーツが不足している。早く見つけ出して帰らないと、命の危険がある。

それに、ユーシイだけではできないこともこれからあるはずだ。まだまだ仲間が欲しい。

（END）

序章 墜落と出会い（後書き）

なんとか生き延びれそうなオリマー。ユーシイという心強い仲間も出来て、ちよつと安心ですね。次回は黄色い子が登場する予定。――騒動ありそうな予感です。

第一章 新たな出会い（前書き）

さあ、いよいよ本格的に探索開始です。果たしてどんなものがオリマーを待ち構えているのでしょうか・・・

第一章 新たなる出会い

遭難二日目／希望の森／

「ふう・・・」

希望の森へ無事到着。

この森には原生生物が多数いるようだ。

ユーシイだけではやはり心細い。新たな仲間がほしいところだ。

「おはよ、オリマー」

「おはよう、ユーシイ」

ユーシイのオニオンは、オレの船に付いて来たのか、すぐ近くに停まっている。

「さて、と・・・」

着地地点周辺を見回す。

岩山に囲まれているから、脱出口を作らなきゃダメだ。

「ユーシイ、どこか壊せるような壁はあるかい？」

どこを見ても、同じように見えるから、この星に住んでいたユーシイに聞くのが早い。

「そうだね・・・。あ、ここなら壊せそうだよ」

そこは、白っぽい土でできた壁だった。

「たしかに柔らかそうだね」

グーで軽く殴ってみると、パラパラと土が舞う。

「よし、ここを壊そう」

「うんっ。で、どうやって？」

「・・・うん」

正直、どうすれば良いのか分からない。

「・・・殴ったり、とか」

「えっ・・・でも、他に方法ないよねえ」

苦笑ながらも、軽くペシペシと殴っている。

その度にちよつとづつヒビが入っていく。

「・・・」

だんだん壁殴りにハマり始めたユーシィ。

「・・・」

ヒビは大きな亀裂となり、やがて

「ふんっ！」

ガラガラガラッ！！

「わわわっ！！」

崩れ落ちる壁。

「案外柔らかかったね・・・」

「う、うん」

これでパーツが探せる。

「・・・オリマー、下がって」

「ん？どうした？」

先を見ると、原生生物、なのだろうか。人影が見える。

「あれって・・・」

「この星の生物だよ。危険だから下がって」

やはり原生生物なのか。でも人の形をしてるってことはユーシィは特別なのかな？

やがて、こちらに気付いたのかゆっくりとこちらへ向かってくる。

ユーシィは、ゆるりと構える。

「あなたは、誰？」

人影に問いかける。

「・・・答える必要、ないじゃない」

人影は応える。瞬間、人影が消える。

ドオオオンッ！！

気付くと人影は先程のところにいた。

ユーシィは腕をクロスさせて、1mほど後ろにいた。

ギリギリのところで防いだのか。

「そんな・・・私の攻撃を防ぐってことは・・・あなたも」 フェア

リー”なの？」

「あなたも・・・？あなたは誰なの？」

人影は目の前まで歩いてくる。

ユーシイは身構える。

「ご、ごめんなさい。もう何もしないわ」

人影は見えるところまで出てくる。

「？あれ・・・ユーシイが、二人？」

ユーシイそっくりの少女。ただ違うのは全体的な色が黄色いこと。

「私はセント。あなたと同じ”フェアリー”よ」

「ふうん・・・。あたしだけじゃなかったんだ」

「！！」

オレに気付いたのか、ギリギリと後ずさりする。

「ああ、安心して。この人はキャプテン・オリマー。この星に落ちてきたヒトだよ」

「ヒト・・・？」

「あ、ああ。今ユーシイに協力してもらってバラバラになった船のパーツを集めてるんだ」

「そ、そうなの・・・」

まだちよつと怯えているようだ。

「うゝん・・・大丈夫だよ、何もしないから」

右手を差し出す。

「っ！」

ズザザーッ！

もの凄い勢いで後ずさる。

「・・・~~~~~」

慣れるまでには時間が必要みたいだ。

「そうだ、セント。ちよつと聞いてもいい？」

「な、なに・・・？」

ユーシイが問いかける。

「この辺りに変な機械落ちてなかった？」

「変なつて・・・」

「いいからいいから」

反論しようとするオレを制止して答えを待つ。

「・・・」

しばらく黙考し、記憶をたどる。

「あ、そういえばあつちのほうに落ちてた」

セントが指差した方向を見ると、先程のような白い壁があった。

「あつちつて・・・壁じゃん」

啞然とするオレたちを尻目にセントは壁に向かって歩いていく。

「私のオニオン、この壁の向こうにあるの」

「ふうん・・・どうやって行くの？」

ユーシイの問いかけにニツコリ笑ってみせると

「ふっ！」

フワツとセントの体が浮き上がる。

そのまま壁の上に乗ってしまった。

「へえ、すつげえ跳躍力だなあ」

「そ、そんなことな　わ、わわわっ！」

下からオレが呼びかけたからなのか、壁の上で後ずさりしたために、壁の向こうに小さな体は消えてしまった。

「！セントっ！」

ユーシイは壁に向かって走り込む。

「はああっ！」

そのまま思いつきリグーで壁を殴る。

たった一撃で白い壁は脆くも崩れ去ってしまった。

「セント！大丈夫？」

「・・・うわー」

呆然としているオレとセントの目が合う。

「・・・は、ははは」

「・・・ふふ」

苦笑ともいえるべき笑顔をお互いに交わす。

「？」

ユーシイは訝しそうにオレとセントの顔を見比べる。

「さて、セント。その機械のどこまで案内してくれるかな？」

「うん、いいわ。こっちょ」

トン、トン、と大きく跳躍しながら先に進む。

セントに先導を任せて、オレはユーシイと並んで歩く。

「それにしても、ユーシイは強いな」

ユーシイに話しかける。

「そんなことないよ〜。わたしにだって苦手なことはあるもん」

「ふうん・・・たとえば？」

「う〜ん・・・水とか」

「水？」

「うん。わたし、泳げないんだ」

てへへ、と舌をちょびつと出して恥ずかしそうに笑う。

「ふうん・・・」

ユーシイは水の中に行けないってことか。

水中に入ったパーツはどうすればいいんだろう・・・。

「・・・セントもかなあ」

「う〜ん、どうだろ。後で聞いてみよっか」

「ああ」

そうこう話しているうちにセントが立っている場所にきた。

「これよ」

「こいつは・・・永久燃料ダイナモか」

無限に使える燃料・ダイナモ。これで夜の電気代をケチらなくてもオツケーだ。

「これを、さっきの宇宙船ってところに運べばいいのね」

「そうなんだけど、こいつあちよつと重いからな〜」

3人で運ぶにはちよつと重いように見える。

「だいじょぶだいじょぶ。あたしとセントでなんとかするよ」

「大丈夫か？」

「任せて。ユーシィ、そっち持つてくれる？」

「オツケー」

左右対称に構えるユーシィとセント。オレはというと、オロオロするばかりだ。

「せーのっ！」

「よいしょ、っと」

軽々の持ち上げる。

「あら、思ったより軽いのね」

「そうだね。これなら簡単に運べるね」

「それじゃあ、そろそろ日が暮れちゃうから早く運んじやいましよ
う」

「・・・すげ」

啞然とするオレを尻目に、ドンドン進んでいく。

この星の生き物たちはみな力が強いのかな？

「オリマー、何やってんの？」

「置いてくよ」

「え？あ、ちよつと待てよ！」

慌てて後を追う。

「あ、ちよつと待つて。ユーシィ」

「ん？どうしたの？」

二人が立ち止まって、何やら巨大な空き缶？のようなものの中を覗き込んでいる。

「やつぱり。あつたわ」

セントが中から、何やらサッカーボールくらいの大きさの岩を持つて出てきた。

「・・・それは？」

あとから追いついて、その岩をしげしげと眺める。

中にとても大きなエネルギーが詰まっていることは見て取れる。

「これは通称バクダン岩。大きな破壊力をもつ、とっても危険な代物よ」

「へえゝ・・・って、持ってて大丈夫なのか？」

とても危険、と聞くと、思わず警戒してしまう。

「ふふふ、大丈夫よ。私が持っている限り爆発しないわ」

「ふうん・・・」

ユーシイの方をチラリと伺う。

ズザザッといった感じで後ずさりした。

ユーシイが退いているところを見ると、バクダン岩はセントにしか扱えないようだ。

「でも、何に使うんだ？そんな危ない物」

「そうね・・・」

辺りをキョロキョロと見回して「こっちこっち」と岩の壁のところに行く。

「うん、これくらいなら一発で十分ね」

セントは岩の下にバクダン岩を置く。

「離れて！」

オレたちは急いでその場を後にする。

ドオンッ！！

鈍い爆発音。

「戻ってみましょう」

先程、岩の壁があったところにはポツカリと大きな穴が開いていた。

「すつげえゝ・・・」

「これなら原生生物だってひとたまりもないね・・・」

「そうね」

そつえばば原生生物ってまだこの二人しか見たこと無い。

「なあ、他の原生動物ってどんな形してるの？」

「そうねゝ・・・。見たほうが早いと思うよ」

そついつてユーシイは先程壊した岩壁の向こうへと向かう。

ユーシイが指差したところに、影が動いている。

「・・・あいつは？」

よく見ると、なにやら小さな子供のようなシルエットだ。もうちょつと近くでみようかと近づいてみる。

「あ、ダメよ！無闇に近づいちゃ」

「え？」

こちらに気付いたのか、テコテコと向かってくる。

よく見ると小さな牙を持っている。獰猛な証拠だ。

オレは敵の攻撃に対して身構える。が

ガッ！！

上から降ってきた何かによって、その原生生物は倒れる。

「ふう・・・。ダメよ、無闇に近づいちゃ」

それはセントだった。

「ゴメン・・・」

改めて、原生生物を見る。

「これは小チャッピーだね。まあまだ並くらいだね」

小チャッピーってことはチャッピーっていうのはこれの大きくしたやつ、ってことなのだろうか。

「こういう原生生物の死骸も私たちの栄養分になるの」

ここからだとセントのオニオンの方が近いということで、セントのオニオンへ向かう。

やはり、ユーシイのオニオンと同じ形だが、色は黄色い。

原生生物の死骸もペレットと同じように吸い込まれる。

だが、ペレットとは違い、ゼリー状にはならず凝固化している。

無駄なところを省いた肉、といった感じだ。

「はい、ユーシイ」

「あ、ありがとう」

二人で分け合う。

オレには大地のエキ스는食べられない。いや、食べられないことはないが、口に合わないのだ。

宇宙船から持ってきた干し肉をかじる。

「ねえねえ、オリマーの食べてるそれってなに？」

「これか？これはオレの星で保存用に作られる食べ物だよ。食ってみるか？」

「うんっ」

コーシイに干し肉を一切れ分けてやる。

「いただきます あむっ」

大地のエキスを食べるとき（？）と同じようにチュウチュウと吸い上げるが、やはりエキスとは違う味がするのだろう。

不思議そうな顔をして、すぐ口を離してしまった。

「うん．．．ちょっとしょっぱいかな」

「それは、吸うんじゃないくて、かじるんだよ」

「そうなの？噛めばいいのね」

思いつきり噛み付く。

そのままクチャクチャと無言で租借すること数分。

「．．．かつたゝい。これホントに食べられるの？」

「そうだな．．．。ホントは煮たり焼いたりするんだと思うよ」

実際は、煮たり焼いたりしてやわらかくして食べるものなのだ。

ここには火がないから、そんなことできないけど。

「そっか、焼けばいいんだね」

コーシイは手当たり次第に葉っぱを集める。

「．．．何してんの？」

「まあ見てなさいって」

葉っぱを一纏まりにすると、両手を翳してなにやら呪文らしきものを唱える。

「大地を燃やすは火の力．．．出でよ、>ファイア・エンチャント
<！」

コーシイの指先から野球球大の火球が生まれる。

その火球を葉っぱの塊に移す。

たちまち火があがる。

「へえ、凄いね」

フェアリー特有の力なのかな。

でも火が使えるようになるっていうのは便利だ。

「私も、似たようなことはできるけど」

そういつてセントも両手を翳す。

「生きとし生けるものを眠りに誘え・・・>サイレス・アップソリュート<」

どこからか素敵な旋律が流れてくる。

森の木々が奏でるのか、それとも紅葉を間近に控えた銀杏の葉か。

「素敵な音色・・・。ふあ、なんだか眠くなってきた・・・」

ユーシイが、大きく欠伸をする。

「おやすみ・・・」

「あ、こら寝るな！」

「スピー・・・スピー・・・」

穏やかな寢息を立てて眠りに落ちるユーシイ。

「ったく、しょうがないヤツだなあ・・・」

「この不便性は自分も眠くなること・・・くあ」

セントもよく分からないことを呟き、小さく欠伸をして眠りの体制へと移る。

「おいおい・・・」

二人して眠っちゃったよ・・・。

「ま、起こすしかない、か」

とりあえずはセントからだ。

「おゝい、起きろ」

頬をペチペチとしてみる。

「・・・スピー」

特に反応なし。

「・・・ツンツン」

わき腹あたりを突っついてみる。

「んく・・・あ・・・ふ・・・」

ピクン、ピクンと反応する。

「お？・・・じゃあこういうのは、どうかな？」

今度は両手を駆使してコチヨコチヨと攪る。

「あは、あっはっはっはっは！何何何なの？！」

「おっ、起きたか？」

「起きました！バツチリ起きましたあゝ！だから止めて」

両手を、わき腹から離す。

「まあ、今回はこれで許してやろうか。新しい発見もあったし、ね」

「はあ・・・はあ・・・」

荒くなつた息を整えるセント。

そして

「スピー・・・スピー・・・」

未だ夢の中のユーシィ。

「あれだけ騒いでたのに、よく起きないなあ・・・」

とりあえず、頬をペシペシする。

「おゝい、起きろユーシィ」

「んんん・・・スピー」

かなり深いとこまで行っているようだ。

「そうね・・・フェアリーは皆わきの下が苦手ね」

思い出したようにセントがつぶやく。

「ふむ・・・」

わきの下をツツーッと指でなぞる。

「きゃっは！」

身を振って逃げるユーシィ。

「・・・ふん」

なるほどあゝ。フェアリーってのも案外脆いのかもね。

「えゝいつ！起きろ！」

「んあっ！きゃはははっ！いやっっ！」

「起きるか？」

「起きます！起きますうゝ！起きるからあゝ・・・スピー」

「起きる気ないだろっ！」

「きゃっははははっ！ いやもうホントマジ無理だっ！」

「じゃあ起きろ」

「むう！ 分かったよう・・・」

むっくり起き上がって伸びをする。

それからセントを視界に捕らえる。

「セ〜ン〜ト〜・・・ あんた何教えちゃってんの？」

目をギラギラさせながらセントにせまるユーシィ。

「さ、さあ何のことかしら・・・？」

あくまで白を切るセント。

「ほほう・・・ そんなこと言っでいいのかなあ？・・・ えいっ
っ！」

「きゃっ！ いや、ダメ！ そこはあ〜っ！」

「このこのお〜！」

二人してゴロゴロと転がりながら笑いあう。

いや、仲がいいのはいいことだけれども。

「ほら、二人とも。 そんなことしないで早くパーツ運ばないと」

「あ、そうだった」

「はふう・・・ 助かった・・・」

二人は立ち上がって、服を叩く。

「さて、と。 もうすぐ日が暮れちゃうね」

「そう。 急がなくちゃ」

・・・

・・・

・・・

・

「ふう・・・」

やはり疲れたのか、座り込んでしまう二人。

「ありがとう。 二人とも」

「いいのいいの。 今日は新しい友達もできたしねっ」

「あら」

二人で笑いあう。仲睦まじい光景といえる。

「え〜っと・・・」

「? 何探してんの?」

「いや、ちよつと・・・。あ、あった」

近くにあったペレット草に向かう。

「?」

「?」

二人して不思議そうな顔をする。

「ふう・・・」

肩の力を抜いて、大きく息を吸う。

「せいっ!!」

一本のペレット草に向けて、正拳を放つ。ペレット草は黄色と赤いペレットを残して地中に戻っていく。

昨日気付いたんだが、ペレット草は次の日になればまた生えてくるらしい。

「ユーシィ、ほら。セントも、どうかな?」

二人に渡す。

「セントは黄色いから黄色の方がいいんじゃないかと思って」

「ふふ、正解」

すっかりセントと仲良くなった。

二人はそれぞれのオニオンへとペレットを運ぶ。
しばらくして、二人は戻ってくる。

「今日はもう、日が暮れるわ」

「そうだね。今日はここまでにしよ」

「ああ、そうだな。明日はもうちよつと探索範囲を広げてみよう」
「うん」

宇宙船を見上げる。未だ28つのパーツが欠けたこのマシン。

「こんなオンボロで宇宙になんて戻れるのかしら」

「あ、言ったなこのやろ」

オンボロ、と言われるとカチンとくる。両腕を振り回してユーシィ

を追いかける。

「あはははっ、捕まらないよ」

「このやるゝ！待てゝ！」

正直、確かにこんなオンボロで宇宙に戻るかどうかは分からない。でもついこないだまでは宇宙を漂っていたのだ。直せばまたきつと戻る。

・・・というか、戻れないと困る。ものすごく。でも、戻っちゃったらユーシイたちともお別れ、か。それはちよつと寂しい気もする。

「捕まえたっ！」

「きゃっ」

二人でもんどりうつて倒れる。

もうすぐ日が暮れる、赤く染まった空を見上げて、二人は何を思うのだろう。

・
・
・
・
・

今日の日記。

今日はセントという心強い仲間が増えた。

未だパーツはだいぶ欠落しているものの、この分なら、30日以内に全てのパーツを探し出せるかもしれない。

今日は初めて原生生物と出会った。

原生生物は皆、人の形をしているようだ。

とても凶暴そうに見えたのだが、中にはユーシイやセントのように、心優しい生物も居るのだろう。

永久燃料ダイナモを見つけ出し、これでまた、宇宙への道を一步前進したことになる。

明日もこの森を探索してみよう。

追記。

今日はよい発見をした。

フェアリーについての弱点的なものを発見したのだ。

フェアリーは俺たちヒトよりも五感が鋭い。それ故になにかと刺激に敏感なのだ。

それと、水は苦手なようだった。水中に落ちてしまったものはどうしよう・・・。

水に強いフェアリーなんているのだろうか。いざとなったら自分でいくしかないか・・・。

第一章 新たなる出会い（後書き）

新たに心強い仲間が増えて、希望も高まってきたオリマー。この先に何が待ち構えているように、この二人がいればへっちゃらな気がしますね。でも水はダメというこの二人。水中戦ではオリマーが大活躍！・・・か？（笑）。今回の内容には、作者の趣味嗜好をふんだんにブレンド（笑）。普段は強いけど、ある一点をつつくと途端に脆くなる女性って、魅力的ですよ（謎）。この趣味嗜好は、今後の作にも影響を及ぼすかもしれません。「ああ、コイツはこういう趣味なんだな。このヘンタイめ」と思っていただければ幸いですw

第二章 芸術はバクハツだ！（前書き）

ピクミンの世界の中でバクハツといえば・・・そう、バクダン岩です・・・

第二章 芸術はバクハツだ！

遭難三日目〜希望の森〜

「今日の目標は、向こうを探索する」

森の南側を指差す。

昨日破壊した岩の壁の向こうだ。

「オッケー」

「じゃあ早速行きましょう」

壁の向こうに来た。

昨日倒した小チャッピーは復活していない。

原生生物は植物より再生が遅いようだ。

「？ねえ、変な音しない？」

「ん？」

言われてみれば、さっきからポーン、ポーン、という音が遠くで聞こえている。

「何かしら・・・？」

歩いていくごとに大きくなる音。

「この辺りからだね・・・」

耳を澄ますと、確かに音はハッキリと聞こえる。

「あの上じゃないかしら」

セントが指差したのはちよつとした高台になっている岩。

「あたしじゃあの上には行けないよぉ」

ユーシイの跳躍力ではさすがに上に届かない。

「私なら・・・」

セントが跳躍する。

素晴らしいジャンプを見せるが、やはりあとちよつとのところで届かない。

「うーん・・・困ったな」

3人で頭を抱える。

3人寄れば何とやらというが、名案となるものは浮かばない。

「この下にある岩壊しちゃえばいいんじゃない?」

ユーシイが下の岩をペシペシとはたく。

「そんなことしたら上に載ってるパーツまで壊れちまうだろ」

多分、音から判断すると上についているのは”気まぐれなリーダー”だろう。

結構テキトーに地図を作ったりする気まぐれなヤツだが、大事に扱えばそれなりに応えてくれる。

案外デリケートなので慎重に扱わなきゃダメだ。

「どうにかして上に行かないと・・・」

「そうね・・・あ」

セントが何か思いついたようだ。

「ねえ、オリマー。私を投げてくれる?」

「投げる?」

唐突な注文だ。

「あなたの力と私の跳躍力を合わせれば届くと思うの」

「確かにそうだろうけど・・・」

まあ試してみる価値はあるだろう。

「んじゃあ、ちょっと試してみようか」

「お願いするわ」

バレーのレシーブのように構えるオレ。

正面に立つセント。

「行くぞっ!」

「ふっ!」

オレに向かって跳ぶセント。

両手の上に飛び乗ったのを確認して、一気に打ち上げる。

「おりゃあっ!」

「せいっ!」

オレの打ち上げと同時に跳躍するセント。

小さな体は岩を大きく超えてジャンプする。

「わわわっ！た、高すぎ！」

アタフタするユーシィ。

「ふふっ、大丈夫よ」

空中で一回転して岩に降り立つ。

「良かったあゝ・・・」

ホッと胸を撫で下ろすユーシィ。

「どうだ？セント。何かあったか？」

下から尋ねる。

「うん、変な機械が二つあるよ」

岩から顔を出して答える。

変、という言葉に少々ムツとくるが、今は抑える。

「持って降りれないか？」

「やってみる」

そういつて引つ込む。

多少手間どったが、どうにか二つともおろすことに成功した。

「これは気まぐれなレーダーと」ただものでないネジ」だな」

見た限りではこの二つで間違いないようだ。

「ただものでない、って、何処が？あたしにはただの”でっかい”

ネジにしか見えないんだけど」

「ふっふっふ、素人には分からないスゴさがあるのさ」

まあ何に使うかは今のところ検討中のパーツだが。

「さて、ちゃっちゃと運んじやおうぜ」

「そうだね」

ユーシィとセントでレーダーとネジを運ぶ。

最短距離で戻ろうとしたら、途中に黒い岩の壁が立ちふさがった。

「うゝん、これは一発じゃ壊せそうに無いなあ・・・」

確かに、白い岩よりもちよつと硬い。

「待ってて。ちよつと探してくる」

セントは近くにあった空き缶に向かった。

しばらくして、3個のバクダン岩を持って出てきた。

「これだけあれば、大丈夫でしょ」

バラバラとバクダン岩を置く。

「さ、離れて」

岩山の後ろに隠れる。

もの凄い爆発音と共に、黒い岩の壁は崩れ去った。

「ん、ちよつとやり過ぎたかな」

岩の壁の横の土でできた壁までもを抉ってしまったている。

「今の音で原生生物が目覚めていないことを祈るよ」

岩壁の向こうは、もう着地地点だった。

レーダーとネジを船に収納する。

「よし、これで地図が見れるようになったぞ」

周辺地域の地図が表示できるようになった。

ついでに、地図に他のパーツの位置を示す印も出ている。

意外に役に立つ部品だ。

「あれ？いくつか動いてるパーツがあるな・・・」

よく見ると地図の印がちよつとずつ動いている。

「それ、多分原生生物に持ってかれてるんだよ」

「餌だと思ったのかな・・・」

硬くて食べられるものじゃないのに、と思う。

「でも間に水場があるから取りには行けないね」

「そうだな・・・。そういえばさ、セントって泳げるのか？」

さつき疑問に思ってたことをきいてみる。

泳げないなら他の方法を考えるしかない。

「ゴメンなさい、泳げないわ」

「そつか。いや、いいんだ。気にしないでくれ」

となると、何か他の方法を考えるしかなさそうだ。

「これで回収できたパーツは4つ。あと一つあればもうちよつと高く飛べるようになるはずだ」

「そしたら他のところにも行ける、ってことだね」

そう、あと一つあればこの森の先にある樹海へ降り立つことができる。

「今日はもう遅い。早く帰って寝よう」

「そうね。それじゃあ、オリマー。おやすみ」

「おう、おやすみ」

二人と別れて、宇宙船へと戻る。

明日はもう一つのパーツを見つけて、次の段階へレベルアップだ。

．．．．．

．．．．．

．．．

．

今日の日記。

今日も希望の森を探索した。

セントのおかげで大分探索範囲が広がった。

今日は気まぐれなリーダーを回収したことで、地図が見れるようになった。

これで回収していないパーツの位置を知ることが出来る。

どんなに困難な状況でも、前に進んでいけばいずれ、きっと解決するのだ。

第二章 芸術はバクハツだ！（後書き）

バクダン岩、凄い威力でしたねー。これからの活躍も期待が高まります。

セントさんは、この章では書いてないですけど、実はとっても目が良いんですよ。ユーシイにはちよつと劣るけどパワーもあります。あ、そうそう、前回のナゾ能力についてなんですが、あれ、実は上手く設定できてません（爆）。”フェアリー”たちの持つ特殊能力、と思っただいてよいかと思います。もう一人の青い娘にも何か一つ能力を、と思っっています。

さて、次の章から私の趣味嗜好が飛躍的に突出してきます（笑）。実際の内容とは徐々にかけ離れていくので、ご覚悟を。

第三章 原生生物と妖精（前書き）

さて、今日も希望の森くでの探索が始まります・・・

第三章 原生物と妖精

遭難四日目―希望の森―

今日も希望の森へと降り立つ。

昨日回収したリーダーのおかげで今後の予定が立てやすくなった。今日も近くにある2個のパーツを回収しよう。日程に余裕を持たせたい。

「・・・つと。オヤマー、行き止まり」

目の前には黒い土でできた壁が立ちふさがる。

「さて・・・岩よりは硬くないはずだから、グーで殴ってりゃ壊れるんじゃないか？」

「そだね。やってみる」

ユーシイは壁を殴り始めた。

白い土の壁ほどではないが、徐々にヒビは入っている。

「あ、ねえ。あそこ、通れるんじゃない？」

セントが指差したのは壁のちょうど横に生えている木の根。そこに小さな穴がある。

「そうだな、これくらいなら通れ無くもないか」

穴を越えて壁の向こう側へと出る。

「ユーシイ」。ちと先の様子みてくるわ」

「オツケー。その間にここ崩しとくから」

ユーシイを置いていくのは多少心許ないが、セントがいるから安心できる。

途中に大きな水場を発見した。

「お、向こう側に壁があるな」

対岸側に白い土でできた壁があった。

「ユーシイとセントは泳げないからあそこはまだ無理だな」
「そうね」

とりあえず水場を後にし、先へ進む。と。
ガサッ。

「！誰だッ？」

背後から物音がした。
多分原生生物だろう。

一瞬見えた人影は「妖精か・・・」とつぶやいたあと目の前から消えた。

「今は・・・？」

「あれはチャッピー。もつとも多く生息している原生生物よ。昔は私たちフェアリーとは仲が良かったのよ」

噂だけど、と付け加えるセント。

「とにかく警戒しなくちゃな」

「ええ」

そのまままっすぐに進んでいく。

目の前に、人影。

「ようこそ、”フェアリー”。おっと、”ヒト”も一緒だったか」

オレたちを出迎えたのは先程のチャッピーだった。

ここはチャッピーの巣だろうか。

後ろには”シヨックアブソーパー”と”ノヴァブラスター”が見える。

「・・・そこを通してもらおうか」

「ならぬ、と言ったら？」

「力づくでも通してもらおうッ！」

前傾姿勢を取るオレをセントが制す。

「待つて。この人、悪い人じゃない」

セントは前方に構えるチャッピーを見据える。

「さすがはフェアリー。ヒトなどと違って物分りが早い」

「なんだと・・・！」

「まあまあ抑えて。私は何も邪魔をしに来たわけじゃありませんよ」
相手に敵意は見られない。

「じゃあ何をしにきたの？」

「私は子を育てる身です。子にはそれなりの栄養源が必要だ」

「・・・何が言いたい？」

「話は簡単です。ペレットを集めていただきたい」

「ペレットを？」

原生生物もペレットを栄養分としているのか？

「はい。もしあなた方が青いペレット『1』を10個集められたら、これはお返ししましょう」

後ろのパーツたちを指す。

「わかった。10個でいいんだな」

こんなところで時間を食うわけにはいかない。

「それではお願いします。私はここで待っています」
オレたちは元来た道を引き返した。

・
・
・
・
・
・
・

・
・
・

「ふうん、青いペレット『1』を10個かあ・・・」

ユーシイは壁を崩し終えて休憩していた。

「でもさ、『1』って何？」

さつきから疑問に思っていたことを問いかける。

「ほら、ペレットには中心に数字が書かれているでしょ？」

「そういえばそうだな」

ペレットには『1』とか『20』とか数字が書いてあったのを覚えている。

「あ、わかった。『1』って書いてある青いやつを10個、ってことかな？」

「ピンポーン、正解」

「よし、じゃあ早速手分けして集めよう」

「オッケー」

「了解」

3人散り散りに散る。

オレはその辺のペレット草から取ることにした。
ペレット草には色が固定されているものと、ルーレットのように変わるものがある。

この地域にはルーレットは多くない。

「青いペレット草を探さなくちゃ・・・」

・・・

・・・

・

「ふう・・・」

とりあえず5つ手に入れた。

ユーシイたちとあわせれば10に達するだろう。
程なくしてユーシイたちは帰ってきた。

「あたしは3つ」

「私は2つ」

これで10個だ。

「よし、さっきのところへいこう」

・・・

・・・

・

「用意できましたか？」

「ああ。約束どおり、10個だ」

「おお、ありがとうございます。それではお約束どおり、これらはお返ししましょう」

一歩下がってパーツへの道を開ける。

「ありがとう、チャッピー」

「いいのです。私にはそれがどんなものなのか、どうやって使うのか、分からないのですから」

「そうだな・・・」

改めて二つを見上げる。ヒトに授けられた科学という名の力。
俺たちヒトには便利であつても、チャッピーやユーシイたちには”
ワケの分らない何か”にしか映らないのだろう。

「こいつは、一人づつ、つてワケにも・・・」

これらのパーツは主に外部へのアタック時に使用するものだ。
ちよつとした衝撃で何が起るか分かつたものではない。ちよつと
危険な代物だ。

「ああ、それなら私がお貸しします。オマエたち、出ておいで」
チャッピーが茂みへ呼びかけると、小さいチャッピー・・・小チャ
ッピーがゾロゾロと出てきた。

よく見ると、この小チャッピーたちには、頭にユーシイたちと同じ
ような葉っぱが付いている。

チャッピーにも付いているということは、もしかしたらこのチャッ
ピーたちとユーシイたちは遠い親戚に当たるのかもしれない。

色もどことなくユーシイに近い感じを受ける。

「オマエたち。フェアリーを助けるんだ」

小チャッピーたちはユーシイとセントと並んでパーツを持ち上げる。

「あら、手伝ってくれるの？ありがとう」

セントが小チャッピーに礼を言う。

小チャッピーたちはちよつと照れ臭そうにしている。

「それじゃ、宇宙船へ運んでくれ」

フェアリーと小チャッピーは協力して、宇宙船へパーツを運んでく
れた。

これで6個。宇宙船は次の段階へとレベルアップする。

「これでもつと高く飛べるぞ」

この先には樹海が広がっている。

そこにもパーツはゴロゴロと転がっているのだろうし、危険も多く
なるだろう。

「ありがとう、チャッピー。それに小チャッピーも」

パーツを運ぶのを手伝ってくれたチャッピーたちに礼を言う。

「いいのです。元々、私たちは戦が好きではありません。あなた方とは、友好関係を築いていきたい」

「そっか。それは助かる。今度また困るようなら手を貸してほしい」

「その時は、喜んで」

友好の証として握手を交わす。

ここに、星と星の小さな友好関係が生まれた。

今日の日記。

今日は2つのパーツを回収した。これでドルフィン号はちょっとパワーアップする。

明日はこの森の先にある樹海へと行ってみようと思う。

森のチャッピーたちと友好関係を築いた。

これからは心強い仲間となってくれるだろう。

樹海ではどんな出会いが待っているのだろう。

・・・水場に強い仲間がいるといいが。

第三章 原生物と妖精（後書き）

さて、今回はオリマーにも活躍の場を、ということで原生物・チャッピーを登場させました。チャッピーもピクミン同様、擬人化して登場します。今回出てきたチャッピーには性別は設定されていません。”子を育てる身”というのは男女どちらも当てはめることができますからね。日本語って便利だ。

ユーシイは今回放置気味でした。ごめんねユーシイ。次は活躍させるよ……。

そういえば、この物語恋愛物に発展することはあるのでしょうか……。相手は異星人と言えど姿形は女の子。オリマーはいえ、若き青年であります。ありえなくはないでしょう……。ゲーム本編では家庭を持っていることになっていますが、今回は若き頃に帰って頂いています（笑）。果たしてこの三人、いや青い子も入れると四人ですか。愛に芽生え、恋に落ちることはあるのでしょうか。待て、次回！（笑）

第四章 新たな出会いとパンもどき（前書き）

さあ、今日は森の奥に広がる樹海へと降り立ちます。

果たしてどんな出会いがオリマーたちを待ち受けているのでしょうか・・・

第四章 新たな出会いとパンもどき

遭難四日目　樹海のへソ

「ふあゝあ・・・」

今日で遭難して4日目。家族や同僚も心配しているはずだ。早く帰ろう。

「んゝと・・・今日は樹海へ降りてみよう。ユーシイ、おきてるか？」

「んゝ・・・？」

「まだ寝てるか」

「んゝ・・・ってオリマー！？あれっ、どこにいるの？」

「多分、お前のポケット」

『ポケット？・・・ああ、コレね』

初日に渡した通信機。もしもの時の連絡手段として渡しておいたものだ。

一応セントにも渡してある。

「おいセントゝ。そっちはどうだ？」

『あら、オヤマー。おはよう、随分早いね？』

「まあな。二人とも聞いてくれ。今日の予定を話す」

今日は樹海にぽっかりと開いた空間へ降りてみようと思う。リーダーによると、結構多くのパーツが流れているようだ。

『ふゝん』

『そこは危険な原生動物が多く住んでいるわ。大丈夫かしら？』

「その点はまあ大丈夫だろう。昼間ならあいつらも大人しいし、森のチャッピーたちみたいに友好的な奴もいるかもしれない」

『そうだね。皆が悪い人って訳じゃないもの』

「あと、リーダーに変な反応が出てるんだ。それも確認してみようと思う」

『変な反応?』

「ああ。ユーシイたちのデーターをインプットしたんだ。ユーシイは赤、セントは黄色に発光する点なんだが、樹海に青い点があるんだ」

『青?』

『また別のフェアリーがいるってことかしら?』

「多分、そう見ていいだろう。できれば仲間にしたい。協力してくれ」

『うん、わかった』

『任せて』

「頼む。よし、じゃあ樹海に向けて出発だ!」

轟音と共に木々を煽りながらドルフィン号が着陸する。

ドルフィン号を囲むようにユーシイたちのオニオンも着陸。中から二人が出てくる。

「よし。まずは青い光点を見に行こう。ここは水場が多い。足元に気をつけて」

「うんっ」

とりあえずリーダーで位置を確認しながら進む。すぐに壁に突き当たる。

「これは白くて柔らかそうだな。ユーシイ、頼む」

「あいよっ」

拳を握って気合を溜める。

「はあっ!」

一撃で脆くも壁は崩れ去った。

「さっすが」

「えへへ」

「ん・・・?」

リーダーに反応。パーツだろうか?

「どうしたの?」

「いや、近くにパーツがあるらしい。さて、どこかな？」
辺りをウロウロする。

反応が出ているのは、どうやら岩山の上らしい。

「こんなに高いと届かないな」

「なにか使える物があるはずだよ」

「ねえ、これなんかどうかしら」

セントが長い枝を持ってきた。

「長さも太さも丁度いいかな。これなら・・・あのあたりから渡れ
そうだ」

ちよつと着陸地点に戻ったところ、岩山を正面に見据えた場所。

「ん・・・ありゃあオートマチックギアだな。あれなら小さいし、
持ってこれるだろ」

セントから棒を受け取り、岩山に掛ける。

「じゃ、ちよつと行ってくる」

「気をつけて」

落ちないように、慎重に、慎重に・・・

「よ・・・つと。ふう。無事に渡れたな。あとは・・・」

オートマチックギアを持つ。

「これ持って渡るのは流石に難しいな・・・」

バランスが取りにくい。

二人に下で受け取ってもらうか。

「おゝい、二人とも！」

「なに？」

「悪いんだけど、下で受け取ってくれるか？コレ持って渡るのは
無理っぽい」

「わかった」

岩山の下まで回りこむ。

「頼むぞ。それっ」

「よいしょつと」

しっかりキャッチ。

「じゃあこれ持っていくわね」

「うん、お願い」

「終わったらこっち来てくれ」

「分かってるわ」

セントにオートマチックギアを任せ、俺たちは青い反応へと進む。

「こつちだ」

「お、オリマーっ。そっち水場・・・」

「ん？ああそうか。ユーシイは水が苦手なんだよな。仕方ない、ちよつと待つててくれ」

「う、うん」

ユーシイを水際へ待たせておく。

「ん・・・？なんだ、反応が弱く・・・ッ！」

目の前に、少女が倒れていた。

「おい、大丈夫か！」

駆け寄って、抱き起こす。

「おい、しっかりしろ！」

「う・・・うう・・・」

「大丈夫か！？」

「う・・・お・・・」

「お？」

「おなか、すいた・・・」

「腹ペコなのか。よし、待ってる。何か食べるもの・・・」

干し肉はダメだ。ええつと、何かないか、何か・・・。

ペレット草。色は青い。

この娘も青を基調としているから・・・。

「あれだ！」

ペレット草に駆け寄り、そのままパンチ。

「うらあ！」

青いペレットを落とす。

それを持って、さっきの子の元へ。

「おい、お前のオニオンは!？」

「・・・、・・・それ・・・」

俺の後ろを指差す。

振り向くと、たった今オニオンが起動したところだった。

「よし。これを・・・こうすればいいのか・・・？」

ペレットを、真ん中に翳す。

オニオンから光が溢れ、ペレットが吸い込まれていく。

しばらくすると、大地のエキスが吐き出される。

「ほら、これでいいか？」

「うん・・・ちうゝ・・・」

少女は大地のエキスを一瞬にして吸い干した。

「ぶはぁ・・・」

「よっぽど腹減ってたんだな・・・」

「あなたは・・・？」

「あ、俺オリマー。この星に不時着して、今宇宙船のパーツを捜してるとこ」

「私・・・スズ。青のフェアリー・・・」

「君もフェアリーなんだね」

「君も・・・？」

「ああつと・・・とりあえず、立てるか？」

「うん・・・」

青を基調とした姿。

やはりユーシイたちに酷似している。

あれ、でもここって水場・・・。

「スズは水は苦手じゃないんだ？」

「うん・・・。私は特別な・・・違う・・・皆特別だけど、私は

水だっただけ・・・」

「そういえばそうだなあ。ユーシイなんかは火が得意だし」

「ユーシイって誰・・・？」

「ああ、赤のフェアリーさ。今一緒に宇宙船のパーツを捜してもら

「つてるんだ」

「赤……。フェアリーは私しか残ってないと思ってた……」

「他にも黄色のセントもいる。二人ともこの辺りには詳しくないんだ。できれば案内して欲しいんだけど……」

「うん……。いいよ……」

「ありがとう。二人にも紹介するよ。こっちだ」

俺はスズを連れて、ユーシイたちの元へ戻った。

「あ、オリマー。無事だったんだ、よかった……。あれ、その子は？」

「フェアリーさ。スズっていうんだ。水場が得意らしい」

「ふーん、そうなんだ。あたしユーシイ。よろしくね」

笑顔で手を差し出すユーシイ。スズはというと……。オリマーの後ろに隠れてしまっている。

「あ、あはは……。どうやら人見知りするタイプらしいな……」

「んー、せっかくだから仲良くやっていきたいなあ……」

「そうね。一緒に旅するんだから仲良くしなくちゃ。あ、私セント。よろしくね」

「うん……。よろしく……」

新しい仲間が増えた。多少人見知りはするが、水場に強いことは何よりもうれしい。

「さて、と……。ここからだ、この動いてるやつが近いな……。つていうか近づいてきてないか？」

「なんだろうね……。多分、原生動物だと思うんだけど……」

「見て。あれじゃないかしら……」

セントが指さした方向を見ると、何やらずんぐりしたものがこちらへ近づいてくる。

「何だあれ……。パン？」

それは大きな食パンにそっくりだった。……。パンもどきと名づけた。その場で。

「こんなの見たことないよ・・・」
パンもどきは、俺たちの横を素通りしていった。
「私たちのことはアウト・オブ・眼中ね・・・」
「別の目的があるのか・・・？」
後を追ってみることにした。

「あ、ねえ、見てあれ。ペレットを運ぼうとしてる・・・」
「あいつもペレットを栄養としているのか・・・」
「あ・・・青のペレット・・・」
「あ、おいスズ。危ないって！」
パンもどきが持つていこうとしたペレットが青かったからか、スズが単身向かっていった。

「スズちゃん、待って！」
コーシイが追う。

「オリマー、私たちも！」
「おう！」

スズの後を追う。

「私のペレット・・・返して・・・」
「%\$#&\$”’\$」

なんだかよく分からないことを言いながら、ペレットを引っ張っていく。

どうやら渡すつもりはないらしい。

「離しなさいよ、この・・・っ！」

コーシイのパンチが炸裂・・・と思いきや。

ふにょん
「わっ!？」

弾力に富んだ表皮によって跳ね返されてしまった。

パンもどきは何事も無かったかのように平然とペレットを引っ張っていく。

その先には、どうやら巣のようなものが見えた。

「お、おい、まずいぞ。巢に入られたら取り返せない」

「こ、こうなつたら力勝負よ！」

ユーシイがペレットを掴む。

「このおゝ！」

「（ゝ%”#”%”%！？）」

獲物をとられると察知したのか、パンもどきはすごい勢いで引つ張つていく。

「うわっ、こいつ強い・・・っ！」

ユーシイですら引つ張られていく。

「私の・・・」

スズも加勢する。が、やはり結果は変わらない。

「あゝもう、見てられないわね」

セントも一緒になつて三人がかりで引つ張る。

「%\$&#”！？！？」

「お、こつちが優勢になつてきたみたいだ。そのままオニオンまで運んじゃえ」

「おっけゝ！」

「んゝ・・・」

「そゝれっ！」

オニオンへ向けて、少しずつ引つ張っていく。

そして、オニオンの下にたどり着く。

オニオンはペレットが来たことを察知してか、いつものようにペレットを吸い上げようとする。

・・・パンもどきを巻き込んで。

「\$#&’%！？」

オニオンの表面に思い切りぶつかったパンもどきから、大きな浮き輪 スペースフロートが飛び出す。

「・・・あゝ」

「・・・なるほど、こうなるわけか」
くいくい。

「ん？なんだ、スズ？」

「・・・これ・・・もらっていい・・・？」

パンもどきを指さす。

「どうやら目を回して動けないようだ。」

「あゝ、いいんじゃないか？」

「ありがと・・・」

スズはズルズルとパンもどきを引き摺っていった。きっとオニオンまで持っていくのだろう。

「・・・さて、と。これを宇宙船まで運ばないとな。・・・といってもすぐそこか」

「これ軽いね。何に使うの？」

「これは水に浮くための道具さ。コレを身に着けておくと、水の中に沈まなくてすむんだ」

「・・・なんで？」

「んゝ、説明すると長くなるから要約すると、中に空気が入ってて、それを浮力にしてるんだ」

「・・・ふーん」

「おまえ分かってないだろ」

「な、何言ってるのよ」

「目が泳いでるって」

「う・・・」

「ま、いいや。とりあえず運ぼう」

「うん」

宇宙船へと運び込んで、今日の調査は終了だ。

「ただいま・・・」

「お、おかえりスズ。どうだった？」

「ん・・・お腹、いっぱい・・・幸せ・・・」

「そっか。今日はここまでだからな。あとはゆっくり休んでいいぞ」
「ん・・・」

「それにしても、スズちゃんって笑わないよね」

「何でかしら？」

「さあて、ね。元々そういう性格なんじゃないか？」
無表情というかクールというか。・・・青だからか？

「ん・・・何・・・？」

「あ、いや、なんでもないよ」

「・・・？」

こう3人で並ぶと三姉妹みたいで面白いな。

並べてみると、それぞれに特徴があることがわかる。

コーシイは天真爛漫、といった感じが漂っている。目が大きくてくりっとしているからだろう。

セントはちよつと吊り目気味なのが特徴かな。世に言う秀才タイプ、というやつだ。

スズはどつちかかっていうとたれ目気味で、ぼーとした感じがある。

「・・・ふむ」

「？どうしたの、オリマー？考え事？」

「ああ、ちよつとな」

三姉妹とは言ったが、誰が姉で誰が妹だろう・・・。

セントは長女タイプだよな。皆を引っ張っていくリーダーシップがありそうだ。

コーシイは丁度中間あたりか。明るい性格が皆を和ませるタイプだな。

となるとスズは・・・。

「スズは、妹タイプ、ってことか・・・？」

「・・・？」

「え、何？」

「あ、いやいや、なんでもない」

いかんいかん、つい口に出してしまった。

でも彼女たちのような妹なら、・・・ちよつと欲しいかもしれぬ。

「さて、もう日も暮れるし、そろそろ空に上がろう」

「はい」

「ん・・・それじゃあ・・・」

「ああ、スズのオニオンは向こうにあるんだっけ。後でこっちに合流してくれ」

「ん・・・」

「気をつけてね」

「うん・・・大丈夫・・・」

「ん・・・っ。ふう。今日も一日ご苦労様でしたっつと」

「明日もここを探索しよう。結構多くのパーツが落ちているみたいだ」

「分かったわ。それじゃあオリマー。おやすみなさい」

「おやすみ、オリマー」

「ああ、おやすみ。しっかり眠れよ」

俺も宇宙船に乗り込む。

「・・・といってもまだ寢床にすらなっていない・・・」

そこら中がぼつかりと穴を空けている。他のパーツがあったところだ。

「ま、でもマクラ代わりになるものはできたな」

今日手に入れたスペースフロートを頭の下に敷く。

「お、なかなかいいな、これ」

このふかふか感がなんとも・・・。

「はあ・・・」

・・・っといかんいかん。今日の日記をつけなければ。

遭難四日目。今日はオートマチックギアとスペースフロートを手に入れた。

どちらも用途は未だ未定だが、現段階でマクラ代わりになるものがあるのはいいことだ。

新しく、青のフェアリー、スズを仲間に加えた。

水場が得意ということで、今後大活躍することは間違いなさそうだ。

いままで観察してきた土地にも、水場は多くあった。

その奥にも、まだパークが眠っているはずだ。

スズがいれば、それらも手に入れることが出来るだろう。

これでまた、帰還への希望が湧いてきた。

明日も樹海を搜索しよう。

どうやら、いくつかのパークは原生物によって運ばれているらしい。

これからどんどん凶暴な原生物とも戦わなくてはならなくなるの
だろうか。

第四章 新たな出会いとパンもどき（後書き）

今回の主題は「青い子・パンもどき・比較」でした。

いよいよ青の子・スズが登場して、探索範囲はグンと広がりを見せます。言葉少なでボーっとした印象を受けるスズ。水場も平気ということで、ユーシイたちとは違った場面で活躍してくれることでしょう。

そしてまた新しい原生生物・パンもどきの登場です。

この子だけは擬人化しちゃうとパンもどきではなくなってしまうのでそのままです、はい。

見た目的には巨大な食パンが蠢いている感じ？です。ルーツはイモムシかなあ。

ゲーム本編でも、ペレットを狙って行ったり来たりする食パンが見られます。私は当初ペレットを引っ張ればいいことに気づかず、オリマーパンチで延々殴り続けた記憶があります・・・。

いよいよ三人娘がそろったということで、改めて三人の特徴をピックアップ。出会ってから数秒で打ち解けられる人当たりの良さは、私たちも見習わなければならぬかもしれませんね。

第五章 星と大地と新たな発見（前書き）

遭難してから五日目の朝。

さてさて今日は一体何が起こるんでしょうか。

第五章 星と大地と新たな発見

遭難五日目　樹海のへソ

「ふあ・・・よく寝た」

やはりマクラがあると寝心地が違うな。

「やゝと起きたよゝつ。オーリーマゝっ！」

「ん？なんだ、ユーシイか？」

「なんだじゃないでしょ？さつきからずっと呼んでるのに返事してくれないんだもん。何かあったのかと思ったよ」

「いやすまんな。つい寝過ごしてしまったか」

「もう。あ、それよりセントが話があるって」

「セントが？」

「ええ。聞いてオリマー。スズがいたところ付近にバクダン岩がいっぱいあるみたいなの」

「それがどうかしたのか？」

「昨日歩いてて分かったんだけど、結構壊せそうな岩壁が多くあったの。今壊しておけば後々楽になると思うんだけど」

確かに、宇宙船までの最短ルートを作るのはいいことかもしれない。

「そうだな・・・。じゃ、そこ行ってみるか」

「ありがとう」

「あの・・・」

「ん？どうしたスズ？」

「近くの水の中に・・・変なの落ちてた・・・」

「どんなやつだ？」

「んと・・・ラッパみたいなのやっ・・・」

「ラッパ・・・んゝ、まあ行ってみれば分かるかな。よし、じゃあ

今日は壁の破壊とそのラッパを取りに行こう」

「おっけ」

『分かったわ』

『ん・・・』

ん、女三人よれば姦しいとはいうけど、朝からなんとも騒々しいな・・・。

ま、こんな生活も悪くないか・・・。

「さて、と・・・」

バクダン岩はリーダーには映らない。セントの勘だけが頼りだ。

「こっちね」

「こっちつて・・・水場、なんだが？」

「そうなのよね。どうしよう？」

「いや、どうしよう？つて聞かれても・・・」

「ねえねえ、あそこから降りればいいんじゃない？」

コーシイが指した方向を見る。

水場を渡りきった先に、横の坂道から降りれるようだ。

「そうだな、まっすぐ水場から行こうとするより安全だ」

俺にはバクダン岩の扱い方は分からない。スズもダメだって言うてたし、どうしてもセントがいないとな。

「よつと」

段差を降りて、先に進む。

「また段差か・・・しかも結構高いな」

「戻ってこれるかしら・・・」

「水場を歩いていければ戻れるみたいだな」

コーシイとスズをその場で待たせて、セントと一緒に段差を降りる。

「あの中ね」

洞穴の中に入っていく。すぐに戻ってきた。

「すごいわ。こんなにあるなんて」

「うわっ、ちよつと多すぎないか？」

両手いっぱいバクダン岩。ずいぶんいっぱいあるな。

「うーん、こんなに持ってたらあそこまで届かないわ」

「じゃあ俺が投げるよ。それなら届くだろ」

「え、ええ。でも、オリマーはどうやって戻るの？」

「俺は水場を超えていくさ」

俺は防衛服のおかげで火でも水でも大丈夫だしな。

「じゃ、いくぞ」

「ええ」

「そ〜れっ」

「よっつと」

上手く打ちあがった。ふわりと着地を決める。

「よし・・・と、もう一つ段差があつたな。急いで戻らないと」

水場を振り返る。と、リーダーに反応があつた。

「ん？なんだ・・・水の中にあるのか・・・？」

近づいて確かめる。

「こりゃイオニウムジェットだな・・・」

宇宙船の加速力となるパーツだ。宇宙へ出るのに必ず必要となる。

ちよつとラップに似てないこともない。

「はは〜ん、スズが言ってたのはこれか・・・」

あとで一緒に来てみよう。

「オリマーっ！早く〜っ！」

「ああ、すぐ行く！」

「よっつ」

「んしょつと」

3人を段差に投げ上げて、間欠泉に乗る。

「ひゃっほーう」

吹き上がる水に乗って、段差の上に上る。

石で塞がっていたものを、手持ち無沙汰だったスズが開けたらしい。

「よし。さて、どこから手を付けたものか・・・」

セントの話によると、宇宙船の着陸地点の近くに一つとその奥に二つ、ちよつと歩いたところに二つあるらしい。

「じゃあ宇宙船の近くから開けていこう。パーツを運ぶ時に多少なりとも近道のほうがいいだろう」

宇宙船の近くまで戻る。

黒い岩で出来た壁がそびえ立っていた。

「これは硬そうだね・・・」

ユーシイが、試しに殴ってみた。

「~~~~っ！！！！いったあゝい・・・これすっごい硬いんですケド」

「そこで、このバクダン岩が活躍するのよ。まあ見ててセントは岩壁の向こうに3個ほど投げ込む。」

ドオオ・・・ン

ガラガラガラ・・・

土煙が晴れると、半分ほど壊れた壁があった。

「うつわ・・・すっごい破壊力だね・・・」

「危ない・・・」

「うつん、ちょっと足りなかったかな。もう3つくらい・・・えいっ」

ドオオ・・・ン

ガラガラガラ・・・

今度は完全に崩れたようだ。

「よしよし。オリマー、3個あまつたけど、どうする？」

「あ、ああ。えっと・・・その向こうの壁にもヒビ入れとくか」

「おっけー。ん・・・あれね」

岩壁を見つけたセントは、その場にしゃがみこんでなにやらブツブ

ッ言い始めた。

「目標までの距離、大体5mつてどこかしら。だとすると、これくらいで・・・よし」

立ち上がって、バクダン岩を構える。

「お、おい、セント？まさかここから投げ・・・」

「そりゃっ、そりゃっ、そりゃっ！」

怒涛の三連投。それらはまったく同じ軌道を描いて、岩壁に激突、爆発した。

ドオンドオンドオオ・・・ン

ガラガラガラ・・・

・・・半分以上崩れたようだ。明日には完全に崩せるだろう。

「いや、すごい遠投だな。さすが」

「まあね。これで一つすることは終わったわね」

「次はなんだっけ？」

「スズの言ってたラッパは、多分さっきのところにある。行こう」
「ん・・・」

「スズ、これか？」

「うん・・・」

どうやら当たりだったらしい。

ユーシイとセントを水辺に待たせて、二人でパーツのところまできた。

「これは軽いほうだから、持てるかな」

「ん・・・大丈夫・・・」

ひよい、と持ち上げる。

「おっけー。じゃあ宇宙船まで運んでくれ」

「ん・・・」

・・・そういえば水に浸かって大丈夫だろうか。使えるかどうか微妙なところだ・・・。

「ね、ねえオリマー。これ大丈夫なの・・・？」

「・・・ダメかな、やっぱり」

宇宙船に取り付けたものの、プスプスと黒煙を立ち上らせるイオニウムジェット。

「はあ・・・。仕方ない、解体して乾かそう・・・」

「解体って、壊しちゃうの？」

「いや、一度バラバラにするんだよ。このまま干しとしても中が乾かないし、そうすると錆びるから」

「ふむふむ、なるほど」

「やっぱり分かってないだろ、お前」

「そ、そんなことないですよ？ねえセント？」

「え？あ、え、ええ、そうね・・・あ、あはは」

「二人とも、目が泳いでんぞ」

「「う・・・」」

「オリマー・・・」

「ん？どうした、スズ」

「・・・くさい」

イオニウムジェットを指さし、鼻をつまんでいる。

「うわっ、ほんとだ」

「やだあゝ、何の臭い？」

「そうなんだよねえ、この臭いさえなんとかなれば問題ないんだけど・・・」

とりあえず、電源を落としておこつ。

「温泉とかで良く嗅ぐ臭いなんだよなあ。何だっけ、あれ」

たしかこのイオニウムジェットの名前の由来になった成分なんだが・・・ド忘れしたな。

「オンセン？」

「ああ、温泉は知らないか、さすがに」

「何なのそれ？」

「んー、温かい泉、みたいなもんかな。皆で浸かって温まるわけよ」

「ふーん、温かい泉か。それならあるかもしれないね」

「そうなのか？」

「さっき間欠泉があつたじゃない？きつとあれ辿っていったらあるんじゃないかなあ」

と、いうわけで。

スズに水脈を辿ってもらつてたどり着いたのは。

「うわあ、すご・・・」

「ひろーい！」

俺の家が丸々入るほどの広さの温泉であつた。

「よーし、早速温泉に・・・って」

宇宙服を脱ぎかけて、気づく。

「・・・これ脱いだら、俺、息でなくなるよな・・・？」

いや、でも外には酸素の反応出てたし、念のために着てたけど、着てなくても大丈夫、なはずだし・・・。

「おーい、何やってんのオリマー？」

「あ？」

見ると、温泉には既に3人の姿。

「おお・・・」

そこには、湯煙に包まれて、肢体を晒すユーシイたちがいた。・・・
服のまま。

「・・・って、服脱がないの？」

「え？脱ぐの？」

「あゝ、そつか。知らないんだっけ・・・」

「もしかして、脱いだ方が・・・良かった？」

・・・なんで顔を朱に染める。

「・・・あゝ・・・ま、いいんじゃないか」

「そう?」

このままでもお湯の温かさは伝わってくるし。

「ふう〜・・・いい気分だなあ〜」

「そうだねえ〜・・・」

「たまにはこういうのもいいわね〜・・・」

「ん〜・・・」

平和だ・・・。何とも平和だ・・・。

「宇宙船が直って、ホコタテ星に帰れたら、今度は慰安旅行としてここに来たいね」

「そしたら、今度はあたしたちが案内するよ」

「ん・・・オンセン、ここだけじゃない」

「大自然の驚異、ってヤツかしらね〜・・・」

「うまいこと言うね」

「えへへ」

俺たちは、今日一日の疲れを、この温泉で癒した。

しばらくすると、く〜、という何とも可愛らしい腹の虫の音がする。

「とは言っても腹はやっぱり減るわけで・・・」

「う〜・・・」

「わかったわかった。そんな目で見るな。ちゃんと取ってきてやるよ」

「わーい」

ユーシイたちを飛行船の前で待たせ、近くを散策する。

探しているのは、もちろんペレットの花である。

「お、あつたあつた」

三色のペレットが咲き誇る花。

「三つ一遍に見つかるなんてラッキー」

それら三つを叩き落とし、飛行船へと戻る。

「ほれ、ユーシイ」

赤いペレットをパス。

「さんきゅー、オリマー」

ユーシィはペレットをオニオンへと運び込む。

「セントと、スズにも」

「ありがとう、オリマー」

「・・・ありがとう」

セントとスズも、それぞれペレットをオニオンへ運び込む。

「さて、と。俺は・・・」

周りを見渡す。

「そろそろ食糧にも気を配って自給・・・は無理か。自足だけはしない・・・」

この星には巨大な木や草が多くある。

もしかしたらそれ相応の木の实や何かもあるかもしれない。

「ん・・・」

「オリマー？何きよろきよろしてんの？」

「いや、木の実が何かないかな、ってさ」

「ああ、それなら・・・ほら、あそこ」

「ん？どれどれ・・・」

ユーシィが指した方向の巨木の上のほう、赤く熟した木の实が下がっている。

「おお、うまそー！」

「でもあれだけ高いと届かないかなあ・・・」

「何々？どうかした？」

セントとスズも食事を終えて戻ってくる。

「あ、セント。ねえ、あの実なんだけど、取れる？」

「あれね。待ってて」

よっ、と軽く跳躍して木の枝に飛び乗る。

「それっ」

更に木の枝を飛び渡り、木の实が成っている枝に到達する。

「すごいな・・・まるで軽業師だな」

「かるわざし？」

「んー、有体にいうと、ピエロってとこ」

「なるほど．．．あ、オリマー、危ない！」

「え？ どわっ！？」

上から降ってきた木の実に押しつぶされた。

「ごめーん、落としちゃったー！大丈夫ー？」

「いつつ．．．あ、ああ、何とか．．．」

それにしても．．．デカイ。

「こんだけありや三日は持つぞ．．．」

とりあえず一口。

「あむ」

しやりつとした果実の歯応え。ジューシーな果汁が口の中いっぱい広がる。

「うん、美味しい」

味はホコタテ星の果物、リンゴと同じ感じ。

水分が豊富でビタミンもタップリだ。

「どれどれ．．．あーむっ」

ユーシイも、カリッと皮を噛んで剥き、果肉が見えたところから果汁をちゅーちゅーと吸い上げる。

「ん．．．あまーい！」

「って実ごと行けよっ！」

と、思わず突っ込んでしまったが。

確かに甘い。いや、甘酸っぱいと言うのか。

とにかく美味い。今のところ干し肉しか味わっていなかった舌は、この新鮮な味をしつかりと記憶した。

「なあ、この実って何処にでもあるのか？」

「そうねえ．．．この実とは違うけど、同じようなのは結構あるわ」

「へえ．．．美味いし大きいし言うことなしだな」

これなら食糧の心配はいらなさそうだ。少しホッとした。

「何々？オリマー、木の実食べるの？」

「ああ。ユーシイたちでいうペレットみたいなもんだな」

「なるほど．．．あ、じゃあじゃあ、見つけたら取ってきて上げ

るよ」

「お、ホントか？助かるな」

「えへへ、いつもペレットを取ってきてくれるお礼」

「そうか？悪いな」

「いえいえ」

「私たちもお世話になってるし、協力しましょう？」

「ん」

それから俺たちは、この巨大な果実を4人で長々と平らげた。

「いや、食った食った」

「美味しかったね」

「大地のエキスを豊富に含んでたみたいね。あと数日もすればそこら辺の木からも採れるようになるかしら」

見ると、周りの木のあちこちに、まだ青い木の実が下がっていた。

どれも大きく、中身が詰まっていることを誇張している。

「うん・・・よし、これなら食事には困りそうに無いな」

「そうだね」

「ん・・・」

「ん？どうしたスズ？」

グツタリと横たわるスズ。ほんのりと顔も上気している。

「あ・・・」

「あ？」

「・・・熱い」

ぱたぱたと手で顔を仰ぐ仕草。

「熱か？どれどれ・・・結構高いな・・・」

スズのおでこに手を当て、熱があるのかどうか確かめる。

「あ・・・ん」

「ん？どうした？のわっ!？」

「ん・・・」

押し倒された。いや、厳密に言えば寄りかかってきた、だろうか。とにかく、下敷きにされた。

「お、おい、大丈夫か？」

「ん．．．ムリ」

「ムリって．．．ん？この二オイは．．．」

これは．．．酒？

まさか．．．

「スズ．．．酔ってる？」

「．．．ん」

やっぱり。

あの果実、低度のアルコールを含んでいたらしい。

確かに、身体は火照ってるけど。温泉に入ったからかと思ってた．．．

「おい、誰かー。助けてくれー」

「何やってんのオリマー．．．よいしょ」

「ん．．．」

「あれ．．．？力が．．．よっ．．．あれれ？」

ユーシイがスズを持ち上げようとするが、アルコールで力が入らないらしく、持ち上がらない。

「あれ．．．？」

どうやら運動したのがまずかったのか、酒の巡りが早くなって全身に回ったようだ。

「世界が回るう．．．」

「お、おいユーシイ」

「あは、あははは」

「いや笑ってる場合じゃないだろ」

「えゝ、でもゝ。何かおかしゝ。あははは」

お腹を抱えてゴロゴロと笑い転げる。

．．．ツボにでも入ったのだろうか。

「．．．何が？」

いや、今はそんなことはどうでもいい。

とにかく、この状況をどうにかしないと。もうすぐ日も暮れるし。

「あれ？　そういえばセントがないな・・・」

確かアイツもさっきの食べてたから・・・

「まさか・・・」

「ん」

「あー、スズ、ちょっと退いてくれるとありがたいんだが」

「やだ」

「やだつて・・・」

「や」だ」

「あーもう、ユーシイはまだ笑ってるし！」

「あは、あははははは、お、お腹痛い」ひやつひや」

つかこつち指差して笑うなー！

「この野郎・・・。えい、もっと笑い転げてしまえ！」

「ひゃわっ！？」

ゴロゴロやつてたユーシイの足をがちりホールド。そして

「コチヨコチヨコチヨ」

「あははははははは！　や、やめ、あはははは」

「おらおら」！　スズ、お前もやつちゃえ」

「ん」

「いやあ」はははははは！　やめ」てえ」！

よく見ると、スズは抱きついてるだけだったりするのだが、どうも全身が敏感になっているらしい。

「よ・・・いしょ、と。スズ」。　ちよつとユーシイの相手してくれ」

「ん」

「え、ちよ、ちよつと待つ、ひゃわ！？　す、スズ、そ、そこだめ、あはははは！」

「せいぜい笑い転げるといいぜ」。　酔いも醒めるかもな」。　はっはっは」

「はっはっはじゃない！　スズ」、　お願いだから離れて」！」

「さて、と・・・」

セントの姿がさつきから見えなかったが・・・状況的に考えてあいつも酔ってるんだろうな・・・。

「お、いたいた・・・おい」

さっきの場所からは影になつてゐる木陰に座り込んだセントを見つけた。

「おい、大丈夫か？」

「え・・・？」

ほんのりの上気した頬。トロンとした眼。荒い息。

「お。おい、大丈夫か？熱でも・・・あつっ！」

額に手を当てるも、宇宙服越しにでも感じ取れるほどの熱さ。ちょっと焦げたかも・・・。

「熱い・・・熱いのお・・・」

「あー、え・・・つと、とにかく、このままじゃ危険だな・・・」
セントを抱きかかえ、ひとまず河へと連れて行く。

「あーつと、泳げないんだっとな・・・まあ浅いから大丈夫だろ」
そつと水面へ下ろす。

「あ・・・冷たい・・・気持ちいい・・・」

セントの周囲の水が見る見るうちにお湯へと変わり、どんどん蒸発していく。

こ、これはかなり危険なんじゃ・・・。

「どうだセント？落ち着いたか？」

「うん・・・そういえば、ユーシイたちは？」

「おつと、忘れてた。ちよつと様子見てくるから、大人しくしてるんだぜ？」

「うん・・・」

ひとまずセントをその場に残し、ユーシイたちの元へと戻る。

「よー、どうだ調子・・・は・・・」

ヤバイ・・・ユーシイから真っ赤なオーラが・・・。

「よーじゃなああああーい！！！！」

「うひゃっ!？」

「危うく笑い死ぬとこだったんだからあゝっ!!」

「いや、悪い悪い。それよりスズはどうした？」

「もう……。スズなら寝ちゃったよ」

「そっか。起こすのもかわいそうだし、オニオンに連れてってやるか」

「うん……。あ、そういえばセントは？」

「あ、そっか、そっちもあるんだ。うゝん……」

スズを置いていく訳にも……。

「じゃあスズは私がおぶっていくから。セントのところにいこ」

「ああ。悪いな」

スズをユーシイにおぶってもらい、急ぎセントの元へ。

「おゝい、セントゝ!」

「あ、オリマー……」

「どうだ、熱は引いてきたか？」

「うん、多少は……」

「そっか。今日はもう遅い。ひとまずオニオンに戻って休むとしよう。よつと」

「あ……」

セントを抱きかかえ、ユーシイと共に宇宙船へ。

「じゃ、スズ寝かしてくるね」

「ああ」

ユーシイはスズをおぶったまま、スズのオニオンへと入っていく。

「セント、大丈夫か？」

「ん……」

水から揚げたことで、また熱がぶり返したみたいだ。

「今日はゆっくり休むんだぞ？」

「うん……」

俺はオニオンの中に入ることはいできない。

入り口まで行こうとするとオニオンが拒否反応を示すためだ。

仕方なく、ペレットと同様に吸い上げてもらうことにした。ちょっと強引だけど。

「それじゃ、おやすみ」

「おやすみなさい・・・」

オニオンに吸い上げられて入っていくセント。

途中で欠伸を漏らしてたから、多分大丈夫だろう。

「オリマー」

「お、ユーシイ。ご苦労さん」

「ん。それじゃあ、私も戻るね。おやすみ、オリマー」

「ああ、おやすみ」

ユーシイと手を振って別れ、お互いの寝床へと戻っていく。

今日は色々あったなあ・・・。

遭難五日目。今日は周囲の壁を大量に見つけたバクダン岩で処理したことで、イオニウムジェットの回収が主な出来事だ。

また、この星の木に成っている木の実には自分も食べることができた。この星での食糧調達はできたが、ユーシイたちには食べさせないほうがいいだろうな・・・。

明日まで引つ張らないといいけど・・・っと、彼女たちに頼りすぎるのもちよつとな・・・。

今日はぐっすり寝られそうだ・・・。

第五章 星と大地と新たな発見（後書き）

極低度、極微量ではありますが、彼女たちには強すぎたようですね。服を着たまま入るのは御法度ですよー。よい子はマネしてはいけませんよーw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4536a/>

キャプテン・オリマー冒険記

2010年10月9日15時36分発行